

UR

UR都市機構の情報誌 [ユーアールプレス]

P R E S S

2013

vol. 34

「特集」

エコに親しむ

「巻頭インタビュー」

山崎直子

—— 宇宙で感じた

「生きている地球」



CONTENTS

1 エコに親しむ

3 [巻頭インタビュー]

山崎直子さん

宇宙で感じた「生きている地球」

7 Case 1 〈町田山崎団地〉

団地で広げる
“米ニケーション”の輪

11 Case 2 〈越谷レイクタウン〉

まち中でネイチャーライフを体験
水辺が育むエコタウン

14 Case 3 〈シャレール荻窪〉

都心の暑さを忘れ
風の吹き抜ける団地に暮らす

17 URのECO

屋上のスペースを
エコにフル活用

19 復興の最前線〈岩手県上閉伊郡大槌町〉

災害公営住宅に地元産木材を活用
産業振興と雇用創出の効果も狙う

21 クロスワードパズル&プレゼント

22 URからのお知らせ

リニア中央新幹線新駅周辺整備の
基本方針策定に関して山梨県と協定を締結
平成25年版 環境報告書
「まち・住まいと環境」が完成

表紙は「越谷レイクタウンフェスティバル」(写真:的野弘路)

季刊「ユアールプレス」
vol.34 (2013年 8月)

発行 独立行政法人都市再生機構
〒231-8315
神奈川県横浜市中央区本町6-50-1
横浜アイランドタワー
Tel. 045-650-0892 / Fax.045-650-0889

編集・制作 I&S BBDO
デザイン ボールドグラフィック
印刷 大日本印刷

1-2ページの写真-I:的野弘路、II:大塚俊、III:田中昌

エコに親しむ

「エコ」といっても構える必要はない。
身近な自然に触れ、その大切さを感じるだけでも、大きな意味がある。
団地の中やその周辺には、意外と豊かな自然が広がっていたりする。
居住者が畑や田んぼを作って楽しむ姿も多く見られるようになった。
エコに親しむかたちはさまざまだが、そこに共通してあるのは人々の笑顔だ。

Case 1

〈町田山崎団地〉
コメ作りで実践する
無駄を出さない生活



Case 3

〈シャレール荻窪〉
自然の風がもたらす
涼しい暮らし



Case 2

〈越谷レイクタウン〉
水上スポーツの楽しさと
自然を守る大切さを学ぶ



interview with
Naoko Yamazaki

「巻頭インタビュー」
宇宙で感じた「生きている地球」

山崎直子

日本人女性2人目の宇宙飛行士として2010年4月、宇宙へ飛び立った山崎直子さん。15日間のミッションを無事終えて地球に戻ってきたとき、強く感じた思いとは何だったのだろうか。そして帰還から3年たった今、宇宙への思いはどのようにかたちを変え、山崎さんを動かしているのだろうか。

写真：矢幡英文 取材：文：船木麻里

国際協力で宇宙にできた施設、国際宇宙ステーション(ISS)に滞在する宇宙飛行士候補に、山崎直子さんが選ばれたのは1999年2月のこと。しかし実際に宇宙を体験できたのは、その11年後だ。その間、2003年に起きた、スペースシャトル「コロンビア号」の事故では、山崎さんの搭乗計画も一時保留になった。

宇宙での仕事は危険が伴う。しかし何が起きても最善を尽くせるよう厳しい訓練を重ね、人知の限りを尽くした万全の準備への信頼があるからこそ、クルーは力強く飛び立てるのだろう。

宇宙から帰還した山崎さんは「美しい地球の姿に感動しました。そして、地球に生まれたこと、自然の尊さに感謝せずにはいられません」と語る。

2010年4月5日
2週間の宇宙生活が始まった

——宇宙空間に出て、最も印象深かったことは何でしょうか？

山崎 やはり無重力になった瞬間ですね。地球を飛び立って8分30秒後、大気圏を脱して無重力状

態になった瞬間、いきなり体が軽くなりました。シートベルトを外したら、体がフワッと宙に浮いて。地上で無重力訓練はしていましたが、本物の無重力状態はもちろん初めて。ですが、私はこのとき、この状態を心の底から「懐かしいなあ」と思いました。

——人生で初めて体験する無重力状態を「懐かしい」と感じるなんて面白いですね。

山崎 そうですね。小学生のとき、理科の先生から「星は水素や窒素、酸素などからできていて、それは人間の体の成分と同じものなんだよ」と教わって以来、私は宇宙をとっても身近に感じてきました。地球は宇宙の中では小さな星の一つ。地球に住む人間は宇宙の「かけら」でできているんだな、そう考えると、宇宙に行くことは、決して遠い冒険に出る気持ちではなく、「ふるさとに帰る気持ち」に似ていると感じるのも自然なのかもしれません。

——2週間の宇宙滞在を終えて地球に戻ってきたときは、「地上

をどのように感じましたか？

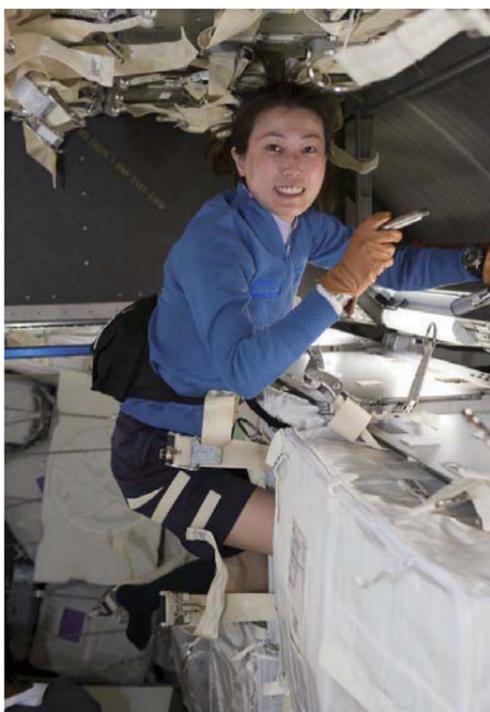
山崎 地球に帰ってきたとき地上の空気を吸ったとき、草木の香りが風に交じって運ばれてきたのが印象的でした。本来ならこれこそ「懐かしい」のでしょうけど、私はむしろ「あらためて愛おしく感じる」新鮮な気持ちでいっぱいになりました。

風が吹くこと、ふつうに呼吸すること、地に足が着いていること、そして優しい太陽の光。そんな当たり前の一つひとつが、心の底から「愛おしい」。私たちが生き

ているこの地球という星はなんて素晴らしいのだろう。地球からいったん離れて戻ってきたからこそ実感だと思います。

——地上では「当たり前前」のことが、宇宙では「当たり前前ではない」経験をしたからでしょうか？

山崎 そうですね。何もない宇宙空間で生活するためには、「持ち込む・作るしか術がない」という体験をしたことで、普段、身の回りにある当たり前の存在やありがたさを身に染みて感じていま



輸送責任者としてミッションを遂行する山崎さん ©NASA



「水を大切に使い、
空気を汚さないようにする。
宇宙船内の環境作りは、
そのまま地球にも当てはまる」

interview with
Naoko Yamazaki

——地上では経験できないことがまだまだありそうですね。宇宙から見た地球はどうでしたか？

山崎 地上400kmの上空に来て、いるのだから、当然地球は足元に見えると思うていたんです。そうしたらいきなり頭の上に現れて、びっくり。

——というの、無重力空間では、上下左右などなく、自分の姿勢しだい、地球がいろんな方向に見えるからなのです。

その地球は、言葉では表現できないほど美しかったです。表面を覆う空気の層が瑠璃色に輝いて、太陽の光が当たっているところは煌々と明るく、反対に日の当たらない部分は漆黒の暗さ。そのコントラストは息をのむほどでした。地球の表面の約70%を占める水の青さを、そこに浮かぶ白い雲が引き立て、緑色の大地はどこどころ茶や赤、青みを帯びて色彩がとても豊か。時折ピカッと雷が光ったり、緑色のオーロラがカーテンのように動いていたり。「地球は確実に生きています」。私ははつきりと感じました。

だが、宇宙には水も空気もない。もちろん食べ物もない。そのままでは生きていけない人間が宇宙空間で生きるには、水や空気、そして食料が不可欠だ。

持ち運んだ資源が限りあることを常に意識して行動する

——国際宇宙ステーション（ISS）では、水や空気をリサイクルしているそうですね。

山崎 はい。ISSの水や空気はとても貴重なものです。リサイクルして大切に使っています。

尿はもちろん、体から出る汗もエアコンで凝縮水として集め、飲み水に変えます。空気は、呼吸で出た二酸化炭素を吸着剤で吸い取り、加熱して化学反応させて酸素を作ります。

——すごい技術ですね。

山崎 そうですね。でも、このようなりサイクルするシステムは人工的に作ったものですが、この浄化作用を地球は自然にやってくれているんです。空気の汚れも排水も浄化して、きれいな状態を保とうと働いている地球は本当

にすごいなと、あらためて感じました。ただ、この地球の浄化作用だつて、決して当たり前でも永久なものでもなく、一度バランスが崩れたら元に戻すことがいかに難しいかということ、私たちが考えなくてははいけません。

——ISS内では水や空気を大切に使うため、どんなことに気をつけていましたか？

山崎 とにかく無駄に使わないこと、できるだけ汚さないことですね。

水は無重力空間では宙に浮いて球体になってしまうので、蛇口やシャワーは使えません。大切に使うためにも、顔や体はごく少量の水でぬらしたタオルで拭く程度。また排水を出さないため、歯磨きで口をゆすいだら、それを飲み込まなくてはいけません。最初は抵抗がありました、慣れるものですね(笑)。

空気は一度汚すと、室内の空気をすべて取り換える必要があります。そのため、実験は密閉空間で行ったり、薬品の梱包は厳重にしたりしました。

極力ゴミを出さないことも大切。宇宙食は、汁まで残さず食べきりました。これもゴミを出さないために必要なことです。

——水をリサイクルし、空気を汚さない、ゴミを出さない。ISS内の環境作りは、地球環境を維持していく課題と重なります。そんなことから、ISSは「小さな地球」といわれています。

山崎 加えて、ISSの宇宙飛行士は、さまざまな国の人が集まっています。みんなが個人とその国の文化を尊重しつつ、何か問題が起きたら全員で解決する。多国籍の人が集まることも「小さな地球」といわれる所以です。

ISSが小さな地球なら、逆に「地球は大きな一つの宇宙船である」ともいえる。大きな宇宙船で、多くの人々が生きていくためには、実際の宇宙開発技術が応用できるのではないだろうか。

——これからの地球環境について、どのように考えますか？

山崎 地球はこれからもまだまだ



シャトルの中で着用するオレンジスーツ ©NASA



宇宙では一滴の水さえ、人間が生きるための貴重な資源だ ©NASA



宇宙から見る地球は、瑠璃色に輝いていた ©NASA



無重力空間では、地球が上に見える下に見える。仕事の合間に宇宙の窓・キューボラで撮影 ©NASA

人口が増えます。国連は50年後には世界の人口が90億人を超えると予想していますが、そうなれば人やモノの行き来も増え、世界はますます狭くなっていくでしょう。

これからは、一人ひとりが「宇宙船地球号」のクルーなんだという気持ちで、世界の人と手を取り合つて自然や環境を考え、安心して住める地球を作っていかななくてはいけないと思います。

技術と技術の「横の連携」を支える側に

——そのために、宇宙を体験した山崎さんは、今後どのような活動をされるのでしょうか。

山崎 宇宙開発というと、何か特別な人が未知の世界に挑むイメージが強いかもしれませんが、実際には宇宙の生活も地球と同じ「衣食住」のすべてに関わっていることなのです。例えば持つていく食料は、一年以上保存できることが条件で、そのための加工技術は地上でも災害時の保存食に生かされています。これは、宇宙で人間が生きるための技術が、地球で生かされた一例です。

宇宙の技術が地上で発展する場合もあるし、地上の優れた技術が宇宙で生かされる場合もある。私は、いろんな分野の技術と技術の「横の連携」を取るために、役立ちたいと考えています。

——山崎さんは、子どもたちに宇宙を語る機会もよく作られていますね。

山崎 実は小さいころから、学校の先生に憧れていたんです。今、「日本宇宙少年団」のアドバイザーとして、子どもたちに宇宙や地球の話をしたり、身近な自然に触れながらチームワークも学んでもらえるような活動をしています。宇宙にはいろんな可能性があるし、まだまだ不思議なこともたくさんあります。広い視野で地球や宇宙の未来を考えられる子どもたちを育てたいですね。

今はまだ日本から直接宇宙に行くことはできません。日本が独自の輸送手段を持てるようになれば、誰もが宇宙に行ける時代が来るはず。そんな日を夢見て、宇宙飛行の経験者としてできることを考えていきたいと思っています。

団地で広げる “米ニケーション”の輪

東京都町田市の町田山崎団地は、
広々とした敷地に中層の建物が並ぶ大規模団地。
その敷地の一部を使って、居住者のグループがコメ作りを楽しんでいる。
水田を通じたエコ活動で住民の新しいコミュニケーションが生まれつつある。

★以外の写真=大塚 俊 取材・文=船木麻里

Case
1

まちだやまざき
町田山崎団地
東京・町田市



今田隆さん(写真一番左)たち6人は町田山崎団地でコメ作りを楽しむ。指導する近隣農家の白井さん(写真左から4番目)は、「ここなら無農薬でおいしい米ができる」と太鼓判を押す

約110㎡の水田でうるち米ともち米を育てる。うるち米の品種は「彩(さい)のかがやき」。埼玉県で作られた品種で、今田さんが「町田と気候風土に近いほうがいいのでは」と決めた。



「ここは浅いわね」

「深いところもあるわよ、気を付けて」

ひざまで水田に漬かって作業をするのは、町田山崎団地に住む今田隆さんら6人のグループ。田植えの済んだ水田に浮かぶゴミを取り除き、肥料をまくのが今日の作業だ。

5月にできたばかりの水田は、場所によって浅かったり深かったり。底が見えないので、思わぬ深みに足をとられ、バランスを崩しそうになることも。「尻もちついても、シリませーん」

ハハハッ」
グループのリーダー、小寺法子さんの威勢のいい声に続き、メンバーの笑い声がのどかな田んぼに響く。手のひらほどもあるカエルもひよっこり姿を現して、メンバーを驚かせていた。

団地の中に田んぼのある風景を

東京都町田市にある町田山崎団地は1968(昭和43)年に入居が始まった。小田急線町田駅からバスで約15分、全3920戸の大規模団地の一面に水田はある。110㎡ほどの水田は、あぜで2つに仕切られ、うるち米ともち米の苗が、夏の日差しを浴びて、力強く成長している。

水田を作った場所は、将来の道路予定地として、建物を設けていないスペース。谷間になっていて、町田山崎団地ができた1968年頃には「ジャブジャブ池」と呼ばれる池があった。当時入居した小寺さんは「子どもの遊び場になっていたんですよ」と懐かしむ。

その後、池の周辺が大型ゴミの不法投棄場所になり、悪臭が出るなどの苦情が出たことなどから埋

め立てられ空き地になっていた。

2年前、防災や地域コミュニティの形成といった観点から、この場所の有効利用をUR都市機構が検討した際、クラインガルテン(貸し菜園)を作る計画が持ち上がった。「それなら田んぼも作ってほしい」と、小寺さんや自治会長の吉岡栄一郎さんたちが、UR都市機構へ熱心に働き掛けた。実は小寺さんたちは、2年前から団地に隣接する小学校の敷地内に水田を作り、子どもたちに稲作体験をさせるという取り組みを行っていた。

「田植えや草取りといった作業も子どもたちと、笑いながら楽しんでやりました。収穫したイネのみを子どもたちに見せて、これが白いコメになるんだよ」と言ったとき、驚いた顔といったら。さらに収穫祭でお餅を頬張る子どもたちの顔を見たら、苦労も忘れてしましました。(小寺さん)

町田山崎団地でもそんな笑顔を見たい、と考えた小寺さんたちの熱意にUR都市機構も応え、一足先にできていたクラインガルテンの隣に水田を設けた。

はだしで、
ドロドロになってコメ作り
笑顔があふれている



菜園、水田… 次はヤギが来る?!

町田山崎団地の水田とクラインガルテンの横には、草が生い茂ったスペースが広がっている。その除草にヤギを活用するプランが具体化している。

現在、UR都市機構技術研究所(東京・八王子市)に試験導入し、安全性などを確認中で、早ければ9月末にも、町田山崎団地でヤギによる除草の実証実験を始める予定だ。

ヤギによる除草は、機械を使った除草と比較すると二酸化炭素排出量が非常に少なく、地球に優しい。また、身近にヤギの暮らしが目に入ってくる環境は、団地住民にとって癒やしの効果も期待できる。



★
技術研究所で飼育実験中のヤギ(上)。草が生い茂った町田山崎団地のヤギの放牧予定地(下)

水田の隣のクラインガルテンでは団地の住民が野菜作りを楽しむ。夏の日差しを浴びてトマト、ピーマン、ナス、キュウリ、ネギなどいろいろな野菜が育っている。20区画を募集したが、満杯になっているので、近くエリアを広げる予定だ

トマト、ピーマン、ナス—— クラインガルテン 貸し菜園も大豊作!



「今回、田んぼを作った場所には自然の湧き水もあります。そして、町田山崎団地は建物の間隔が広いので、風通しもよく、日照も十分です。こうした環境ならいい田んぼができるはず。団地のど真ん中に田んぼがある。いいじゃないですか。そんなのどかな風景を、ここに作りたいと思います。ね」と吉岡さんは話す。

収穫はお餅やおにぎりに

UR都市機構のバックアップがあったとはいえ、これまでの作業は決して楽なものではなかった。水田が狭く農機を入れられなかったため、人の手で作業を進めなくてはならないからだ。

「できたばかりの田んぼの中には、ぜか石ころだらけで、田植えの準備の最初の2日間はひたすら石拾い。それと草刈りも大変。もともと草がはびこっていた場所なので、いくら草刈りをしても次々に生えてくる。あぜだけでなく、田んぼの中にも生えてくるんですよ。田んぼの周りに石ころと刈った草の山ができるほど。今もまた石ころと草との闘いです」(小寺さん)

水田は保水が大切。UR都市機構では、そのために水田の土の下にビニールシートを全面に敷くプランを立てた。しかし、今田さんたちの「ビニールシートがなくても大丈夫ではないか」という意見を取り入れて、今年は半分に敷いて様子を見ることにした。「実際に農作業をする方の意見が一番大事です」とUR都市機構の担当者は話す。

近隣農家の指導を仰ぎつつ、農作業は基本的に6人でやってきました。唯一の男性メンバー、今田さんは土壌に適した苗を探したり、収穫後の脱穀に使う千歯こきの刃を福井県の農家まで出掛け、調達してきたりと小学校でのコマ作りのおかげで大活躍。吉岡さんは、今田さんが持ち帰った千歯こきの刃を台に取り付けるなど、さまざまな場面でバックアップしている。

ぬかは肥料や洗顔に、わらは正月飾りに 収穫したイネは捨てる場所がない



収穫はごはんとして食べるだけでなく、もみ、ぬか、わらも残らず活用する。例えばわらは正月飾りに使う予定だ。今年は、昨年、小学校で取れたコマのぬかを肥料として使っている

小学校で子どもと交流

(写真提供:今田隆さん)



★
昨年は、町田市立七国山小学校の敷地の一部を借りて水田を作った。田植えから収穫まで小学生とともに楽しんだ



広々とした敷地に、余裕を持った間隔で建物が並ぶ町田山崎団地



★
道路の予定地に、右手前から水田、クラインガルテン、ヤギを飼う計画もある草場が並ぶ

「私が田んぼでナマズを飼おうか」と言うと、女性陣から「えっ、イヤよ、そんなの。却下!」と総スカン。全員、田んぼに関しては素人だけど、ああだこうだと知恵や意見を出し合って、楽しくやっていますよ」と今田さんは笑顔で話す。作業が終わるとあぜに座って、持ち寄ったお茶やお菓子でワイワイやるのも大きな楽しみだ。

「イネは丸ごと利用できて、どこも無駄がない。そんなイネの使い方を通して、ものを大切にするエコな暮らしを多くの方に知ってほしいですね」(小寺さん)

「私が田んぼでナマズを飼おうか」と言うと、女性陣から「えっ、イヤよ、そんなの。却下!」と総スカン。全員、田んぼに関しては素人だけど、ああだこうだと知恵や意見を出し合って、楽しくやっていますよ」と今田さんは笑顔で話す。作業が終わるとあぜに座って、持ち寄ったお茶やお菓子でワイワイやるのも大きな楽しみだ。

「イネは丸ごと利用できて、どこも無駄がない。そんなイネの使い方を通して、ものを大切にするエコな暮らしを多くの方に知ってほしいですね」(小寺さん)

まち中でネイチャーライフを体験 水辺が育むエコタウン

都心から北に約25km、埼玉県越谷市の南東部に位置する越谷レイクタウン。
2008(平成20)年3月にJR「越谷レイクタウン」駅の開業と同時に「まちびらき」をした。
このニュータウンでは、まちと一体で計画された大きな調節池を中心に、
水辺で快適な都市生活を送るための、UR都市機構によるまちづくりが進んでいる。
豊かな水と緑に囲まれたレイクサイドでは、自然と共生した新しいコミュニティが生まれている。

★以外の写真=的野弘路 取材・文=船木麻里



セイラビリティ越谷の小学生スタッフは、参加者のライフジャケット着用を手伝ったり、ディンギーの操作を教えたりと大活躍



越谷レイクタウンの全景イメージ



まちの真ん中に周囲5.7kmの調節池がある。周りには遊歩道「レイクサイドウォーク」が巡らされ、自然観察を楽しみながら2時間ほどで1周できる(上)。イベントを主催したNPO法人セイラビリティ越谷の代表理事、久川雅大さん(右下)。「コンパクトシティ」として設計された越谷レイクタウンの全景イメージ(左下)

この地域は荒川や中川などの河川に囲まれ、古くから大雨による洪水被害に悩まされてきた。上野・不忍池の3倍の広さがあるこの調節池は治水対策として機能し、平常時は水の流れをコントロールして、水質や水量を保つ仕組みになっている。同時に暑い日には調節池からの冷気が周辺に広

老若男女問わず楽しめる「アクセスディンギー」は、風の向きや強さに合わせて帆の角度を操作して動かす

イベントを主催したNPO法人「セイラビリティ越谷」の代表理事、久川雅大さんは「このイベントは、ただ楽しいだけではありません」と言う。「水辺のアクティビティを通して自然と親しみ、自然環境を維持していく意識を高めることが目的なんです」。

午前中には、参加者全員で調節池を巡る遊歩道「レイクサイドウォーク」を歩きながら、池やピクトープに棲んでいる生き物の観察や、池の水質調査も行った。周辺一帯の自然の状態を知る学習体験も、イベントプログラムに入っているのだ。水辺にはナマズやヌカエビ、ギンナなどが見つかる。「多くの種類の生き物がいてびっくりした」と話す子どもたちの姿に、久川さんは「このイベントが、自然の生態系を守ることの大切さに気付くきっかけになれば」と期待する。

水辺の環境を考える機会に

7月のある日曜日、越谷レイクタウンのシンボル「大相模調節池」の湖畔で行われた「越谷レイクタウンフェスティバル」。地元近隣の小学生やその家族およそ50人が集まり、ディンギーやカヌーなどの水上スポーツを楽しんだ。イベントで使用しているディンギーは、安定感に優れた「アクセスディンギー」と呼ばれるもので、操作しやすく、年齢や経験を問わず楽しめるのが特長だ。

「ディンギー」と呼ばれる小型ヨットから、子どもたちのこぼれんぼかりの笑顔と大きな歓声が、夏の暑さを吹き飛ばす。「風がぼくらを運んでくれるんだ。最高だよ!」うれしそうに話す、小学5年生のアニメ大雅くんは、弟たちとディンギーに乗ったりカヌーに乗ったりと大忙しだ。ディンギーの舵を取る姿も様になっていて、とても初体験とは思えない。

Case 2

こしがや
越谷レイクタウン
埼玉・越谷市

おぎくぼ
シャレール荻窪
東京・杉並区



シャレール荻窪の環境を
満喫する正木京子さん
と5歳の伶旺(れお)くん



都心の暑さを忘れ 風の吹き抜ける団地に暮らす

新宿から電車でわずか十数分、杉並区荻窪に2011年、「シャレール荻窪」が誕生した。
荻窪駅の南にあった「荻窪団地」が、半世紀を経て生まれ変わった。
環境に配慮した空間に、涼しい風が吹き抜け、コゲラなどの野鳥や昆虫が遊ぶ。
そこには都心の暑さを忘れるエコな暮らしがある。

写真=★的野弘路、★田中 昌 取材・文=谷内信彦



水質検査の合間に自然観察。珍しい鳥や虫を見つれたり、葦(あし)で草笛を作ったりと、子どもたちは思い思いに自然を楽しむ



午前中のイベントプログラムは「川の好感度チェック」。炎天下の湖畔を歩きながら、湖の水質検査を行った



ニュータウン内の道路には、自転車ができるよう専用レーンが設けられている

がり、ヒートアイランド現象を抑制するクールスポットとしての効果もある。「とくに夕方になると、打ち水をした後のように涼しくなります」。毎日のように湖畔を訪れる久川さんはこう話す。

機能面ばかりではない。池の存在そのものが住民の憩いの場になっている。イベントの参加者も、「このあたりは多くの河川に囲まれて水郷こしがやと言われている。その割には水に触れる機会が少なかったため、子どもたちと水に親しむ経験ができるのはとても貴重で楽しいことですね」と笑顔で話す。

コンパクトなまちづくり

越谷レイクタウンは、まちのつくりそのものが環境負荷の軽減を目指したエコタウンとなっている。最寄りの駅をはじめ、日本最大級のショッピングモール、保育園などの公共施設が、住宅から徒歩15分圏内にある。また、道路には「自転車専用レーン」も設けられ、住民はクルマに頼らず生活できるように工夫されている。コンパクトシティの実現、調節池

をはじめとした自然や生態系に配慮した環境の創造活動などが認められ、越谷レイクタウンは世界的にも高い評価を受けている。久川さんは「これからは住民が『自分たちのまち』という意識を持って自分たちでまちを管理し、環境を考えてコミュニティを形成していくことが課題です。ここを誰もが暮らしやすいまちにしていきたい」と語る。

現在、セイラビリティ越谷には30人ほどのスタッフがいて、イベントの運営や水辺の清掃などを行っている。そのうち小学生スタッフが6人。ディンギーの操作をマスターし、イベントでは初体験の参加者を先導する頼もしい一面をのぞかせていた。

久川さんは「水辺のスポーツを通して、教えることの喜びや、仲間と協力し合うことの大切さも学べるのです」と、子どもたちを見守る。こうした子どもたちが成長して地域コミュニティの新たな担い手となってくれば、水と緑に恵まれた越谷レイクタウンはより一層の成熟を見せて、さらに魅力的なまちへと発展していくに違いない。



暮らしに優しい環境配慮満載の団地



善福寺川沿いに設けられたクラインガルテンではさまざまな野菜がすくすく育つ。雨水を利用できる手押しポンプも備え付けられている



風車と太陽光発電パネルによる電気を街灯などに活用。駐車場を建物1階に入れて、敷地内のコンクリートで覆われた面積を減らしたり、壁面緑化や屋上緑化を取り入れたりすることでヒートアイランド現象の軽減に貢献している

緑の中、虫を追い掛ける伶俐くん。環境に配慮したシャレール荻窪は子育てに最適だ



キツツキの仲間であるコゲラやアゲハチョウを見ることが出来る。雨水を利用した小鳥の水浴び場も用意した

あつて、完成とともに入居した。「駅前には建物や道路の照り返しのせいか暑く感じる。こは、緑が多くて涼しい風が流れるので駅前より2〜3℃は低い感じですね」。

コゲラやアゲハが舞うまち

さらに、シャレール荻窪では、建物の間を流れる風を住戸内に積極的に取り込むよう間取りなども工夫した。玄関側に窓を設けたり、間仕切りも引き戸にしたりすることで、バルコニー側と玄関側の間に風が流れる。岩田さんも、室内を風がすつと行き渡るのを感じながら暮らしているという。

風がゆつたりと動いていて、優しい感じがします」と話すのは、秋葉原からシャレール荻窪に引っ越ししてきた正木京子さん。

正木さんは敷地内のクラインガルテン(貸し菜園)を借り受け、花や野菜作りに挑戦している。「忙しいのであまりきちんと手入れはできませんが、どうにか育つものですね。水をやるために階下に降りて畑に向かうとき、ふと頬に風が当たる、そんなことがうれしく感じます」。

秋葉原の利便性は捨てがたかったものの、自然が少ないと感じ、子どもの将来を考えて引っ越しを決めた正木さん。シャレール荻窪には、環境保全の指標となるキツツキの仲間のコゲラが飛来し、アゲハチョウが舞う。都会では珍しい生物も目にする事ができる自然がある。「子どもたちも最初は虫を怖がっていましたが、今では追い掛け回すほど、すっかりたくましくなりました」と笑顔で話す。

シャレール荻窪では自然にあふれた環境の中で、風という恵みを受けて快適に過ごすエコな暮らしが実現している。



敷地を東西に貫く通路は、風の通り道であると同時に、大きな木が植えられて木陰で涼める場所になっている。夏の日差しの中でも、子どもと安心して遊べる場所だ



敷地の横を流れる善福寺川の涼しい風を取り入れている

配置計画を立案する際、風洞実験をして風の流れを確認した



涼しい風を感じて暮らせる団地

風が通り抜けるように2階の高さまで通路を広げた建物。風を感じながら会話をを楽しむ橋本・前自治会長(左)と岩田・現自治会長(右)

JR中央線の荻窪駅から徒歩13分、「シャレール荻窪」の、すぐ脇には善福寺川が流れ、敷地の南北に大きな公園や緑地がある。敷地内を涼やかに渡る風が自慢の一つ。「夏でもほとんどエアコンは使わないわね」と、ほほ笑むのは前自治会長の橋本悦子さん。「窓を開けるだけで室内の空気がそよぐ。自然の扇風機みたいなもの」と笑う。

シャレール荻窪は、1958(昭和33)年に日本住宅公団(現UR都市機構)が建設した荻窪団地を、2011年に建替えて誕生した。1965年に荻窪団地に入居した橋本さんは自治会長を12年務め、建替えにも深く関わった。UR都市機構では団地内や近隣の住人を参加者とするワークショップを20回以上開催して、団地建替えの課題を議論した。その話し合いの輪の中には常に橋本さんの姿があった。

紀の間、私たちが育んだ自然を継承するプランになりました」

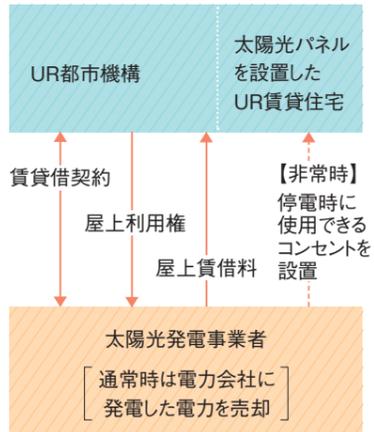
もともと荻窪団地には善福寺川からの涼風が流れ込み、夏もかなり涼しく過ごすことができた。UR都市機構は建替えに当たっても、その自然の恵みを引き継げるようプランを検討した。風の流れを実測調査したり、八王子の技術研究所で縮尺250分の1の模型を作成し、住棟の並べ方や間隔を変えては風洞実験を繰り返した。

その結果、敷地南側からは善福寺川緑地からの涼風、西側からは善福寺川からの川風を取り込む風の通り道を設けるプランが得意になった。配置だけでなく建物も風通しに配慮。建物を貫く通路を2階の高さまで開いた天井の高い構造にすることで、風をさえぎらないように工夫した。こうした配慮で隅々にまで風が通る団地が誕生した。

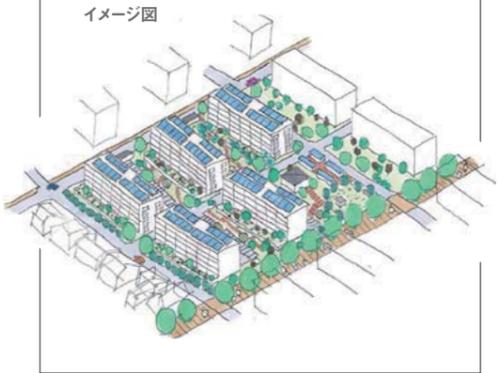
「たった15分ほどの距離なのに、駅前とは涼しさが違うね」と語るのは、2年前に隣の阿佐ヶ谷から移ってきた現自治会長の岩田安順さん。以前から荻窪団地一帯の自然環境を気に入っていたことも

URパワーの取り組み

停電時には
非常用電力として活用



イメージ図



シャレール荻窪の屋上に設置した太陽光発電パネル(共用部用)。専有部用の太陽光発電パネルも共用部用とは別に設置している

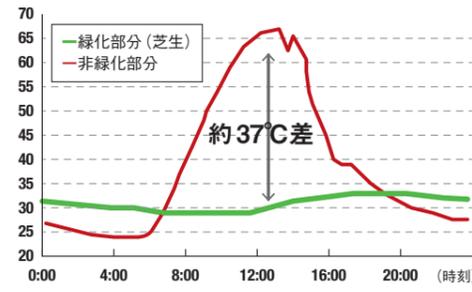


エレベーターホールには、発電量を知らせる表示板がある(シャレール荻窪)



多摩平の森(東京・日野市)では施設内の東屋(あずまや)の屋根にパネルを設置して雨水の循環システムに活用している

屋上緑化の効果



技術研究所屋上緑化実験温度測定(2001年8月1日)

緑化しなければ70°C近くになるが、緑化すれば40°Cにもならない



アーベインビオ川崎(川崎・幸区、写真上)やシャレール恵比寿(東京・渋谷区、写真下)のように、遊歩道を設けたり、遊具を設置して公園のような設計にした屋上緑化もある



周辺に住宅が立ち並ぶグリーンプラザひばりが丘南では、屋上緑化でヒートアイランド現象の抑制を図っている

URのECO 屋上のスペースを エコにフル活用

UR都市機構は日本住宅公団の時代から半世紀以上にわたり、環境に配慮したまちづくりに取り組んできた。普段あまり目にしない屋上もエコに活用している。

写真=★田中 昌 取材・文=谷内信彦

屋上緑化

建物や周囲の温度を下げ ヒートアイランド現象を抑制

東京都西東京市の「グリーンプラザひばりが丘南」。建物の立ち入り禁止になっている屋上に上ると、芝生に覆われたきれいな緑地が広がっている。寝転んで休めるわけでもない緑地が、なぜあるのか。答えは「屋上の温度を下げるため」。強い日差しを受ける屋上は、夏場の昼間、コンクリートの表面が65°C以上にも！このようにコンクリートの建物などに熱がたまることによって、その地域の気温が上昇する「ヒートアイランド現象」は都会の深刻な環境問題だ。

その改善策の一つが、屋上に芝生や樹木を植える「屋上緑化」。UR都市機構の実験では、屋根を芝生で覆うことにより、表面が35°C以上も下げられる(上図)。

2001(平成13)年の東京都を皮切りに、全国各地で、一定以上の面積の建物に関して屋上緑化を義務付ける自治体が増えていく。UR都市機構はそれに先駆けて、

て、屋上緑化に積極的に取り組んできた。1993年には、当時の本社ビルなどで屋上緑化の実験を開始している。

実験の結果、建物に極力負担の掛からない設計マニュアルを作成。標準的な土の厚さはわずか15cmだ。他にも防水や排水性にも配慮したり、水分が少なくても枯れにくい植物を選ぶなど、メンテナンスの面にも気を使っている。

UR賃貸住宅などで屋上緑化した面積は2013年時点で約15haに及ぶ。サッカーグラウンドなら約21面にもなる。こうした一連の屋上緑化の取り組みが評価され、平成24年度日本造園学会特別賞を受賞した。

太陽光発電

既存建物の屋上を賃貸 非常用電源としても利用可能に

2012(平成24)年7月、「再生可能エネルギーの固定価格買取制度」がスタートした。太陽光や風力などの再生可能エネルギーで発電した電力は、その地域の電力会社が一定価格で買い取ることを国が約束する制度だ。

UR都市機構は、再生可能エネルギーの普及および電力供給の拡大に寄与する取り組みとして「URパワー」を始めた。UR都市機構が管理する既存団地の屋上を、発電事業者に貸し出す。事業者はそこに発電パネルを設置して発電し、買取制度で売却する(左上図)。

プロジェクト第1号は東京都町田市の「ニュータウン小山田桜台」。25棟の屋上を使い、来年1月から発電を開始する予定だ。居住者にとってうれしいのが、太陽光発電システムが非常用の電源としても使えること。万一、災害で発電所や送電網が被害を受け停電しても、携帯電話の充電やラ

ジオの使用などが可能になる。

UR都市機構は、今後、全国で太陽光発電に適した建物を選び、賃借を希望する発電事業者の公募を行う予定だ。最終的には約23ha(サッカーグラウンド約32面分)の面積を貸し出し、7200世帯分の消費電力に相当する年間発電量35MWを目指している。

また、団地の新築に当たり、太陽光発電システムをUR都市機構が設置するケースも増えている。1996年の「アルビス旭ヶ丘」(大阪・豊中市)を皮切りに52団地に導入した。発電した電力は多くの場合、エントランスや廊下の照明など共用部で使用している。今後も積極的に導入を進める予定だ。

2011年に完成した「シャレール荻窪」では太陽光発電パネルを、一部住戸の専有部用にも設置した。対象住戸の居住者には、「実質の電気代がゼロになった月もある」と喜ばれている。



大ケ口地区の災害公営住宅はスギなどの地元産木材を多用して、木造ならではの温もりを感じさせる



復興の最前線

第1回 [岩手県上閉伊郡大槌町]



完成目前の大ケ口地区災害公営住宅の前で。右から、大槌町復興局用地建築課長・西迫三千男氏、UR都市機構大槌復興支援事務所・渡邊正彦、釜石地方森林組合参事・高橋幸男氏

災害公営住宅に地元産木材を活用 産業振興と雇用創出の効果も狙う

岩手県大槌町は東日本大震災で町長を含め町職員の約3割に当たる40人が犠牲・行方不明となった。復興の担い手となるはずの町職員が不足する中、UR都市機構は震災直後から支援スタッフを派遣し、仮設住宅の建設や復興まちづくりに取り組んできた。この8月、東日本大震災復興事業における同機構初の災害公営住宅が大ケ口地区に完成した。町民の定住を目指した建物は部材に地元産木材を多用して、「大槌らしさ」をデザインしている。

写真=井上 健 取材・文=茂木俊輔

岩手県大槌町の大ケ口地区災害公営住宅が、この8月に完成した。UR都市機構が東北の被災各地で展開する「災害公営住宅整備事業」の第1弾。震災で住まいを失った方々のための住宅で、濃い緑の山々に囲まれた川沿いの敷地には、木造平屋建てと2階建ての集合住宅計12棟が和風のたたずまいを見せる。

UR都市機構大槌復興支援事務所の渡邊正彦がこの地に赴任してきたのは2011(平成23)年7月のこと。地震発生から4カ月近くがたっていたが、町はまだ大きな混乱の中にあった。津波で多くの建物が流され、仕事の拠点となるような施設は全く見つからなかった。翌年1月、ようやく役場の仮設事務所の一面を仕事場として借りることができた。住まいを確保できたのはそれからさらに半年後。渡邊はほぼ1年間、近隣の釜石市など、わずかに営業している宿泊施設を転々としながら仕事を続けた。「食事はほとんどがコンビニで買ったおにぎり。この1年間で3年分くらいのおにぎりを食べました」と渡邊は笑う。

一刻も早い住宅建設を

UR都市機構の被災地での役割は、震災直後の仮設住宅の建設から、まちの高台移転、被災地のかさ上げ・再整備、被災者が定住できる公営住宅の建設など、多岐にわたる。新しいまちづくりについて住民の方々と協議したり、人手の足りない地元公共団体に代わって工事の発注や監理などを行うのも重要な役割だ。

建築技術者として長年、団地再生計画の現場などで指揮を執ってきた渡邊にとっても、被災地という特別な環境の中で、それらの業務をスムーズに進めていくことは決して容易なことではなかった。心を砕いたのは、地元の信頼を得ること。住民説明会ではどんな質問にも真摯に答え、本音で話し合える関係を築くことに努めた。仮設住宅で不便な暮らしを強いられている人たちに、一刻も早く快適に暮らせる住宅を提供したい。人手も時間も足りない中で、いかにスピードを上げて仕事を進めていくか。他の被災市町村に比べスタートが遅れていたこと

もあり、渡邊は2年間、常にそのことを最優先に考え続けてきた。

住み続けてもらう工夫

大ケ口、屋敷前での災害公営住宅の建設が決まり、大ケ口二丁目、杵内町方の建設要請を受けると、渡邊はそれに専念する。大槌町、UR社内の計画・設計部隊と連携を図りながら仕事を進めた。大ケ口地区の災害公営住宅の最大の特徴は、地元産の木材を使用した木造建築であることだ。そこには、町の将来を考えたさまざまな思いが込められている。

大槌町は震災で多くの住民を失っただけでなく、震災後の人口流出も続いている。「人口減少を食い止めるためにも、入居者の方々に長く住みたいと感じてもらえるような住宅にしたかったです」と、大槌町用地建築課長の西迫三千男氏はその狙いを語る。西迫氏も、震災後に大阪・堺市から駆けつけた応援部隊の一人だ。地元産木材の活用は、地元産の活性化と雇用創出の面でも効果が期待できる。供給は、地元の森林組合である釜石地方森林組合が担

当した。同森林組合も津波で事務所をすべて流された。組合長を含め4人の役員が犠牲になり、一時はその存続も危ぶまれた。それでも、残された役員は懸命になつて組織を立て直し、周辺の事業組合などと協力して供給体制を整えたのである。

森林組合参事の高橋幸男氏は、「地元産木材を使って災害公営住宅を建設することが決まったことで展望が見えたのです。大口の需要が生まれたことで、一般の需要者に向けた供給体制も再び整えることができ、地元に新たな雇用を生み出すこともできました」と、笑顔で語る。

10月には屋敷前地区で同町におけるUR支援の災害公営住宅の第2弾が完成する予定だ。2カ所の災害公営住宅の完成は、今年度いっぱい定年を迎える渡邊にとって大きな区切りとなる。だが、渡邊の中でこれは通過点。本当のゴールはその先にある。「東北の復興はまだこれから。人手が足りずに遅れているところが数多くある」。渡邊の目には、すでに次の現場が見えているようだ。



大屋根を採用した和風の公営住宅

住戸内のような

大槌町におけるUR都市機構の復興まちづくり支援

復興市街地整備	地区名	面積
	町方	36ha

※面積は事業計画等の面積を表す(小数点以下四捨五入)

災害公営住宅整備	地区名	戸数
	大ケ口	70戸
	屋敷前	21戸
	大ケ口二丁目	22戸
	杵内	13戸
	町方(末広町)	52戸

※戸数は建設要請戸数(大ケ口、屋敷前地区は建設戸数)を表す
2013年8月19日時点

山梨県と「リニア中央新幹線 新駅周辺整備の基本方針策定に 関する協定」を締結

2013年7月16日、山梨県庁にて、山梨県とUR都市機構は、リニア中央新幹線新駅周辺整備の基本方針策定に関する協定を締結しました。

本協定は、山梨県の新たな玄関口となるリニア中央新幹線新駅周辺について土地利用や基盤整備等の指針となる基本方針を県が策定するにあたり、UR都市機構が検討委員会への参画やアド

バイスなどを通じて、県に協力することを定めています。UR都市機構はこれまでの駅周辺の都市整備の実績に基づき、アドバイスしていく予定です。

2027(平成39)年に東京・名古屋間で開業予定のリニア中央新幹線は、2015(平成27)年の工事着手に向けた手続きが進んでおり、リニア新駅設置の計画も検討が進められています。



協定を締結した横内正明山梨県知事(右)と、内田要UR都市機構副理事長



実験線を走行中のリニアモーターカー
(写真提供:山梨県)

平成25年版 環境報告書「まち・住まいと環境」が完成



UR都市機構の環境配慮の取り組みを
分かりやすくまとめた一冊になっている

UR都市機構は、2013年度の事業活動における環境配慮の取り組みについてまとめた、平成25年版 環境報告書「まち・住まいと環境」(本編・ダイジェスト)を作成しました。

平成25年版環境報告書では、UR都市機構の環境配慮方針に基づいた年次報告とともに、UR賃貸住宅の屋上を活用した太陽光発電普及促進への取

り組み「URパワー」、震災復興における環境配慮の取り組みなどについて紹介しています。

また、簡易版としてダイジェストも作成しています(本編は省資源を図るため、ホームページ上のみで公開)。本報告書をご一読いただき、皆さまから広くご意見をお伺いすることでより一層、環境に配慮してまいります。



なお、本報告書(本編・ダイジェスト)は、以下のURLからご覧いただけます。

www.ur-net.go.jp/e-report/

「UR PRESS」Web版もお楽しみください!



内容充実の「UR PRESS」Webサイト。特集の巻頭インタビューや記事のオリジナル動画なども掲載しています。ぜひサイトもご覧ください。

UR PRESS

検索



<http://www.ur-net.go.jp/publication/web-urpress/>

URのツイッター

UR都市機構のツイッターでは、イベント、キャンペーン、募集情報などをタイムリーに発信しています。ぜひアクセスしてみてください。

http://twitter.com/UR_TOSHIKIKOU



2012年度 役職員の報酬・給与等

UR都市機構の役員の報酬及び職員の給与の水準等について、総務省の定めるガイドラインに基づき、UR都市機構のホームページに掲載しています。

<http://www.ur-net.go.jp/jkougai/hoshusuijun.html>



編集後記

団地の中に水田?! まち中でヨット?! 驚いていただけましたか? 本号は、エコをテーマに編集しました。少々硬く感じられるテーマですが、皆さまにサプライズとともにお届けできるよう、UR都市機構の取り組みの中でもユニークなものを中心に取材しました。UR都市機構がつくった団地やまちにはたくさんの自然があります。自然に親しみ、楽しみながら環境やエコについて考えていただけるきっかけになれば幸いです。

タテのヒント

- 1 線路と道路の交差点
- 2 サラブレッドといえばどんな動物?
- 3 スケート場=?
- 4 バンダの大好物
- 5 飲んだり食べたり歌ったりするうたげ
- 6 1年に4回、発行する「○○○誌」
- 8 ペットボトルやアルミ缶は「○○○ゴミ」
- 10 寄席で聞く
- 13 疲れると目の下に現れる“動物”
- 15 花火になったり、蚊を取ったり
- 17 年下の女きょうだい
- 18 一年中、夏です=○○○○の島
- 19 臆病者の代名詞
- 20 日本は東京、アメリカはワシントンD.C.
- 22 日本もニュージーランドも○○国

ヨコのヒント

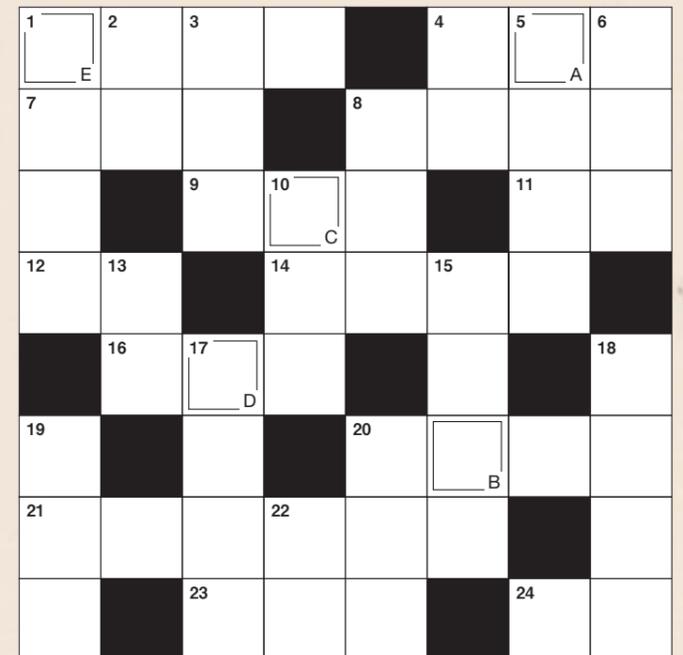
- 1 軒下に吊るし音で涼を感じます
- 4 為替レートの変動で得られます「円高○○○」
- 7 20歳○○○は未成年
- 8 財産をたくさん持っている人
- 9 中華料理にも...海で漂う透明な生物
- 11 ○○誌・○○単・○○想
- 12 地球の3割はこれ
- 14 煙で調理します
- 16 親と、はぐれてしまいました
- 20 冬に結氷しない日本最北の湖
- 21 この新幹線の愛称は「つばめ」
- 23 リコピンたっぷりの夏野菜
- 24 歩くほど、底が減ります

プレゼント付き CROSSWORD PUZZLE

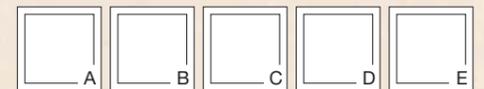
[クロスワードパズル]

クロスワードパズルの解答をアンケートはがきに
記入して応募ください。抽選で10名の方に山崎直子さんの
『宇宙飛行士になる勉強法』をプレゼントいたします。

マジックスタジオ=作



Answer



Present

抽選で
10名様に
プレゼント!

山崎直子さん著
『宇宙飛行士になる勉強法』
(中央公論新社)

33号の解答

マ	チ	ツ	ク	リ
シ	ラ	ハ	カ	イ
ユ	シ	ツ	チ	ナ
ク	ジ	ラ	ヨ	コ
ジ	キ	コ	ウ	シ
ツ	ユ	イ	リ	ヨ
ウ	ン	ソ	ウ	ア
ア	ト	ウ	フ	ヤ
セ	ン	ロ	ト	ウ

応募要項

UR PRESS vol.34 読者プレゼントへの応募は、本誌に同封の応募はがきにクロスワードパズルの解答と必要事項をご記入のうえ郵送ください。

応募の締め切りは
2013年10月31日
(当日消印有効)です。

当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。

——— 街に、ルネッサンス ———



UR都市機構